



TITLE:

京大上海センターニュースレター 第255号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科上海センター

CITATION:

京都大学経済学研究科上海センター. 京大上海センターニュースレター 第255号. 京大上海センターニュースレター 2009, 255

ISSUE DATE:

2009-03-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/71040>

RIGHT:

京大上海センターニュースレター

第 255 号 2009 年 3 月 2 日

京都大学経済学研究科上海センター

目次

シンポジウムのお知らせ

熱銭論争が提起した中国の課題

長征：西路軍の壊滅

+++++

シンポジウムのお知らせ

京都大学経済学研究科上海センター / 経営管理大学院関西アーバン銀行寄付講座

中国企業シンポジウム

「中国の内需拡大政策下における日本のビジネスチャンス」

2009 年 3 月 16 日(月)13:00-17:45

京都大学時計台記念館 2 F 国際交流ホール

改革開放以降、中国経済は外資を積極的に取り入れることにより急速な成長を遂げ、GDP や対外貿易大きく拡大させ、世界経済におけるその存在感の高まりには目を見張るものがある。こうした中で、最近起きた世界的な規模での金融危機・経済危機は外需依存の強い中国経済を直撃し、輸出の急速かつ大幅な落ち込みにより、中国経済は急激な縮小傾向を示している。こうした事態を受け、中国政府はこれまでの外需依存体質を改め、内需依存への転換を目指して 4 兆元とも言われる大規模な内需拡大策を打ち出し、鉄鋼、自動車、造船、石油化学、紡織、設備製造、電子情報などの主要産業を対象として「重点産業進行計画」を策定中である。すでに飽和点に達している日本の内需と異なり、中国の内需は拡大の余地が膨大であり、そこに日本のビジネスチャンスがある。

本シンポジウムでは、中国政府が現在策定しつつある「重点産業振興計画」の内容を明らかにし、外需依存から内需依存への転換を図る中国経済に日本はどのように対応していくべきかを検討する。その上で、そこに日本にとってどのようなビジネスチャンスが存在しているのかについて、内外の研究者や実務家をお招きして検討していきたい。

報告内容(案)

杉本孝：大阪市立大学大学院創造都市研究科教授 / 京都大学経営管理大学院客員教授

「経済危機下の中国産業振興政策 - 鉄鋼業の事例 - 」

稲田堅太郎：法円坂法律事務所弁護士「中国の内需拡大策と対中ビジネス」(仮題)

山本晃：信永中和会計事務所会計士「経済危機下の中国会計制度が直面する諸課題」(仮題)

宮崎卓：京都大学大学院経済学研究科准教授「京都環境企業の対中協力の可能性」

懇親会 18:00-19:30 (会場検討中)

協力 京都大学上海センター協力会

熱銭論争が提起した中国の課題

伊藤忠商事理事 石田 護

2008年の熱銭論争

2003年以降、人民元切上げ期待から、中国に大量の熱銭が流入した。熱銭は流出に転じると、金融市場と為替市場の安定を脅かす可能性がある。中国経済学界では熱銭の規模と影響について論争が繰り広げられた。

熱銭は為替管理制度では存在しないはずの投機資金であるため、正確な統計がない。2007年までの熱銭流入額を1兆1000億ドルと推計した研究が注目を集めた。現在の外貨準備高の過半が熱銭流入の結果ということになる。

熱銭は貿易に潜んで流入すると言われた。典型的には、輸出のオーバーインボイス（契約価格以上の外貨を受取る取決め）である。日本商社における筆者の国際金融業務の経験から判断して、こうした方法による熱銭流入は否定できないが、言われる規模になることは考えられない。その規模の外貨資金の手当てが困難であり、また、中国の為替管理が障害となるからである。

為替管理強化のコストと効果

中国では従来から通関データと対外決済データを照合して、各取引の真実性を検証していた。以前の日本の為替管理と基本的に同じ仕組みであり、制度としての欠陥は認められない。それにもかかわらず熱銭が流入するため、外為管理局は昨年7月、為替管理を更に強化した。すなわち、輸出代金は「審査待ち口座」に入金され、外為管理局が商務省、税関と結ぶコンピューターにより取引の真実性を確認するまで、企業はそれを人民元に交換できなくなった。企業はその時点まで為替リスクを負う上、事務量増加と人員採用などの行政対応コストの増加を強いられている。

為替管理強化に熱銭流入の抜け穴封じに対し一定の効果があるだろうが、それが国を挙げての莫大な労力とコストに見合うか疑問である。一部の研究者は、中国の貿易黒字急拡大は主に輸出生産力増大の結果であって、偽貿易による熱銭は言われる程の規模ではないと考えている。スタンダード・チャータード銀行も5000億ドル程度と推測している。筆者は、中国はみずからが過大評価した熱銭に怯えて、必要以上に為替管理を強化したと考えている。

実際に、早くも昨年第4四半期には、熱銭は流出に転じた。厳しい為替管理と豊富な外貨準備から判断して、流入した熱銭が一斉に流出して、人民元の大幅下落を引起す可能性は高くない。

リーズ・アンド・ラグズへの対応

先進工業国では、企業は先物為替予約によって為替リスクを回避するものである。しかし、中国では、一般企業を対象とした為替先物市場が創設されたのは2005年8月のことである。現在のところ、まだ流動性が不足しているので、銀行は企業のニーズに充分に応えることができない。中国企業は、かつての日本企業と同じく、リーズ・アンド・ラグズと呼ばれる輸出代金回収の前倒しや輸入代金支払いの先延ばしなどにより人民元高リスクを回避した。

外為管理局は、こうした取引にも限度を課した。投機に利用されるとの理由からであるが、実際に企業の重要な為替リスク回避策である以上、合理的な為替リスク回避と考えられる金額と期間の範囲で許容すべきである。実際に、国務院は12月に企業の前受決済比率と輸入支払い先延ばしをそれぞれ前年度実績の10%から25%に引き上げると発表した。

中長期的対策は、先物為替市場育成である。その前提条件は、金融市場整備と資本移動の自由化である。何故なら、先物為替相場は、二国通貨の先物為替レートと直物為替レートの差（年率）が二国間の金利差に等しくなるまで、金利裁定取引が行われることによって形成されるからである。

熱銭流入を阻止するため資本自由化を一時停止する主張があるが、先物為替市場の前提条件である金融市場整備と資本取引自由化は、人民元が経済大国の通貨として成熟する過程で避けられない重要課題であることを忘れてはならない。

熱銭論争が提起した問題

熱銭は、マクロ経済問題にとどまらず、為替管理のあり方や先物市場構築など企業経営の環境整備に関するいくつかの問題を提示した。

日本は1980年代後半には世界最大の資本輸出国になったが、1998年まで時代遅れの為替管理を維持して、円と東京市場の国際化を妨げた。過剰な為替管理はその必要性が消滅した後も温存され易

い。

中国は、熱銭の脅威が去り次第、早い機会に為替管理の過剰な部分を解消することである。そうしないと、中国企業は国際競争において不利益を蒙るばかりか、人民元と上海金融市場の国際化という長期目標達成が妨げられる。この意味で、国務院が昨年12月、輸出入の照会制度改革など手続きの簡素化とリーズ・アンド・ラグズの限度緩和に動いたことは、正しい方向への第一歩であった。

編集者注：本稿は中国『東方早報』に掲載された論稿の日本語版です。

<http://www.dfdaily.com/node2/node23/node103/userobject1ai152247.shtml>

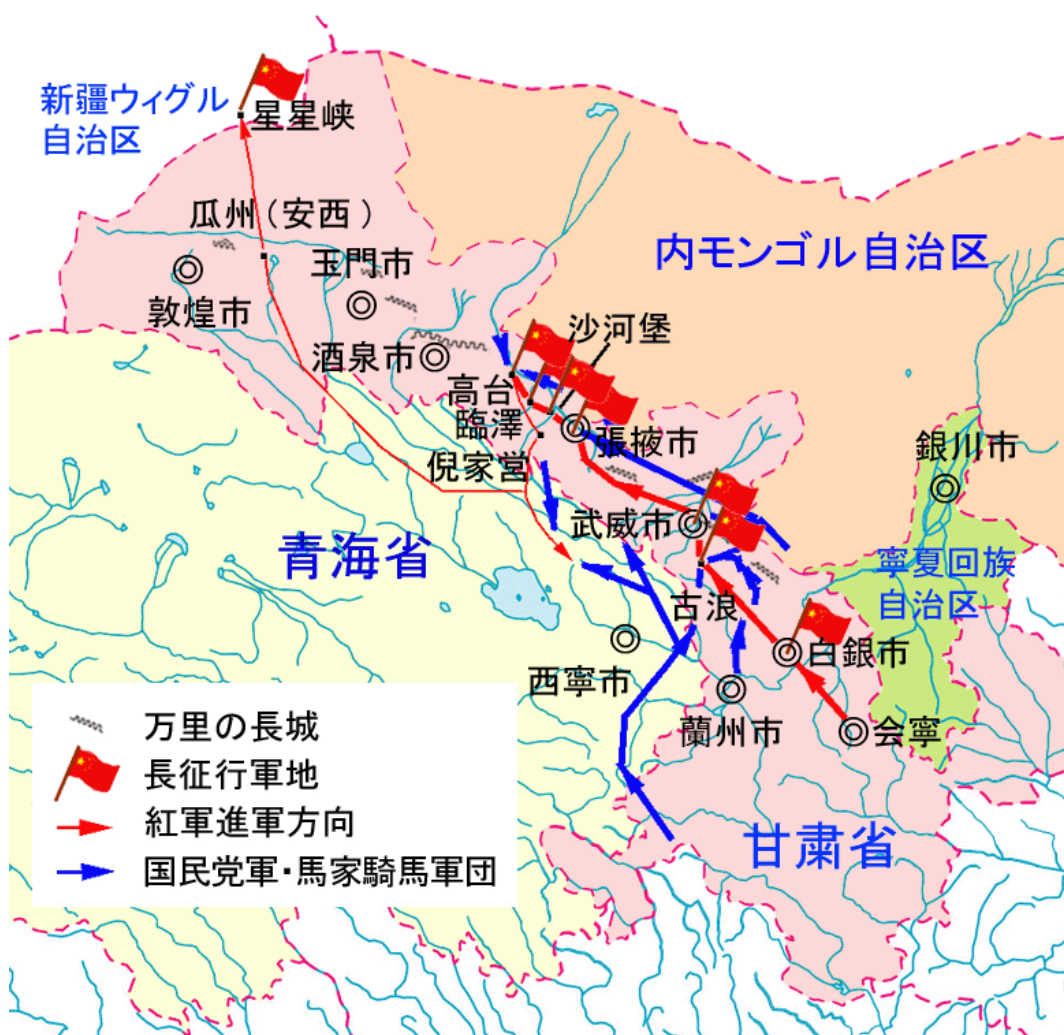
長征：西路軍の壊滅

20.FEB.09

小島正憲

一般に長征は、1936年10月、労農紅軍の第1・第2・第4の3大主力が甘粛省の会寧で合流したところで終わったとされている。だから、その後も長征が続行されており、ソ連との連絡路を作るために西路軍が結成され、甘粛省の河西回廊で回族馬家軍団と激戦を展開し壊滅したという事実はあまり知られていない。2008年11月、私はこの西路軍の壊滅の真相を調べるために、出発地の甘粛省の会寧から長征最西端の新疆ウイグル自治区の星星峡までをたどってみた。

.....今回の目次.....1.なぜ西路軍は壊滅したのか.....2.西路軍作戦は毛沢東の指示だった.....3.回族に怨念なし.....



1. なぜ西路軍は壊滅したのか。

労農紅軍の三大主力である第1・2・4の三軍は、1936年10月、甘肅省の会寧で合流を果たした。それを記念して会寧の街の電柱のすべてに、3本の赤旗が並んだ看板が取り付けられている。また街の中心部に立派な記念館が建っている。



1936年11月、合流した労農紅軍はソ連との連絡路をつくることを目的にして、寧夏を経て外モンゴルに出る作戦を立てた。ところがそのルートは馬家軍と蒋介石軍に完全に阻止されたので断念することになった。次に中共中央革命軍事委員会は西路軍を編成し河西回廊をたどって新疆ウイグル地区へ抜け、ソ連との連絡ルートをつくることを決定した。その陣容は第4方面軍の第30軍、第1方面軍の第5・9軍、新たに編成された西路軍直属隊の四軍で、総勢21,800人であった。主席は張国燾派の陳昌浩、副主席は徐向前、委員として李先念らが名を連ねていた。この中には数百名の独立婦人部隊も含まれていた。



会寧合流記念址

当時、蘭州、涼州(武威)、甘州(張掖)、肅州(酒泉)、瓜州と続く河西回廊は、馬歩芳・馬歩青ら回族軍閥の率いる馬家騎馬軍団(約10万人)が牛耳っていた。その真っ只中に、西路軍2万数千人が突入して行ったのである。河西回廊は漢の時代に、漢族の衛青や霍去病が匈奴と死闘を繰り返した場所である。その後、漢族は蛮族の侵攻を防ぐため、この新疆ウイグル地区近辺まで万里の長城を築いたのである。この地方は回廊という名にふさわしく、両側を山や砂漠に挟まれた細長い地形が延々と続いている。しかも遮蔽物など一切なく毛沢東特有の遊撃戦などとてもできない場所である。なお、霍去病は匈奴に対抗するために、名馬を集め機動力を駆使して戦った。ところが西路軍は歩兵部隊が主力で、この回廊で縦長の正規戦の陣を敷き、結果として馬家騎馬軍団に餌食にされた。岡本隆三氏も「長征」でその愚策を言い立てている。

さらに青海・四川・寧夏から胡宗南軍を中心とする国民党軍約8万人が、陝北に根拠地を置く紅軍と西路軍を分断するために、この地に進出してきていた。西路軍2万数千人に対して、敵軍は実にその7倍を越し、兵力差や地形から考えて、この作戦は西路軍には到底勝ち目がなかった。



万里の長城の最西端付近

私は会寧から白銀市に入り、そして古浪へ抜けた。ここは両側を山に挟まれた地形で隘路になっており、いわば回廊の玄関のようなところである。すでにここで西路軍は退路を胡宗南軍に断たれ、馬家騎馬軍団に包囲蹂躪され、ことに第9軍団は兵力の過半を失うという大損害を被った。ここにはこの戦場で散った兵士たちのために、立派な石像が作ってあった。

1936年12月中旬、西安事変の影響で、西路軍は方針を変更し東進することとなった。しかしながらその命令は午後には取り消され、引き続き西進することになったという。まさに朝令暮改の作戦命令であった。このとき西進をあきらめ、全力で陝北根拠地に戻っていれば西路軍の壊滅は免れていたであろう。この方針の変更の理由や発令者についてはいまだに不明である。



古浪の隘路

その後西路軍は激戦を繰り返しながら西進し、主力の第5軍団は張掖の西方の臨沢・高台に、第9軍団は北方の沙河に、第30軍団は南方の倪家営子に陣を敷いた。高台から倪家営子までは50kmあり、まさに縦長の陣を敷いたわけである。この陣形は馬家騎馬軍団にとっては格好の餌食であり、彼らは自由自在に戦っては退き、退いては戦い、西路軍を防戦一方に追いやった。高台、臨沢が陥落し、多くの兵士が倪家営子に逃げ戻り、



20日間の激闘の末、馬家騎馬軍団のサラ族部隊を撃破し倪家営子から東へ進む血路を開いた。もしここで一丸になってそのまま東進していれば西路軍は壊滅を免れたにちがいない。ところが陳昌浩は再び反転し倪家営子へ入り込んだ。この時点で西路軍は再び誤りを犯したのである。馬家騎馬軍団は舌なめずりしてこれを待ち受けており、西路軍は9昼夜の激闘を繰り返したが倪家営子を守り抜くことはできなかった。西路軍はゲリラ戦を展開することに決定し、倪家営子を捨て、梨園口から祁連山へ逃げ入った。この途中で馬家騎馬軍団に西路軍の女子部隊が捕捉され、ほとんどの女性兵士が犯されそして殺された。かろうじて生き残った女性兵士も彼らの手で奴隷に売り飛ばされたりしたという。

古浪の西路軍記念石像



倪家営子の周辺

西路軍の残党は山中に分け入り、石窩山に結集したが、衆寡敵せず、ここで陳昌浩は断腸の思いで西路軍の解散を決定した。西路軍はここで左右に分かれて、ばらばらに逃げるようになった。東進する者たちはゲリラ戦を展開しながら、劉伯承の来援を頼みの綱にして陝北の根拠地に戻ることを目指した。西進する者たちは祁連山の奥深くに分け入り、新疆ウイグル地区方面へ逃げ、そこでソ連からの援軍との合流を目指した。いずれにしても生き延びる望みはきわめてうすかった。その後、東進した者たちは壊滅し、残った者は乞食に身をやつして、三々五々、陝北根拠地にたどり着いた。その中には徐向前や陳昌浩が含まれていた。西進した者たちは李先念を先頭にして祁連山中を彷徨し、1937年4月中旬、忽然と安西(瓜州)に姿を現した。そこで彼らは馬家騎馬軍団を振り切り、新疆ウイグル地区に逃げ込み、陳雲がソ連から派遣した副官らに再会し助けられた。そのときわずか400名たらずであった。

私は臨沢の西路軍記念館に行ってみた。そこは訪れる人がまったくなく、わざわざ管理人に館の鍵を開けてもらい見学した。内部は他の長征記念館とはまったく異なり、負け戦の悲惨な写真が多く展示してあった。さすがの私も見学後は気分が落ち込んだ。それでも引き続いて倪家営子付近の激戦地を歩いてみた。現在は水路が切り開かれており、緑豊かな農家が多かった。農地のかたわらに激戦地であったことを記す石碑が建っていた。近くにいた農夫が、陳昌浩が西路軍の解散を決めた悲劇の場所に、紅石窩という石碑が建てられていると教えてくれた。ぜひ行きたかったが往復6時間余かかるという話であり、まったく人が行かない場所であると聞いたので断念した。なお、古浪から高台まで各所に西路軍の戦跡が石碑や記念館として残っていたので、私はそれらをつぶさに見て回ったが、いずれにせよ負け戦なので訪れる人が少なく、資料にもほころがかぶっているような有様だった。その極めつけは星星峡だった。観光地で有名な敦煌を横目にして、私は新疆ウイグル自治区へ砂漠の中の道路をひた走り、やっとの思いで星星峡にたどりついた。しかしその町の飲食店やガソリンスタンドで記念碑の場所を尋ねたが、だれも知らなかった。何人にも聞いて回ったあげく、やっと土地の人とめぐり合いそこまで案内してもらった。それは道路から少し入っただけの場所にひっそりと建っていた。私はここまで逃げ延びてきた西路軍兵士の気持ちに思いをはせ、その砂だらけの石碑をハンカチで綺麗にぬぐった。

毛沢東の死後、徐向前は西路軍の失敗の要因を次のように語っている。

・任務や方針の頻繁な変更。 ・戦力不足、地形不利、得意な遊撃戦が行えず。 ・陳昌浩の指導力の欠如。 ・敵軍の軽視。



長征最西端：星星峡の石碑

2. 西路軍作戦は毛沢東の指示だった。

いずれにせよ西路軍作戦は大失敗で終わった。共産党の中では、長い間、この西路軍の壊滅については張国燾の分裂路線の結果であるといわれてきた。

岡本隆三氏の著書「長征」の中でも、「河西の死闘」という項で、西路軍問題について次のように言及している。「紅軍三大主力が、甘肅省東部の会寧で大合流をとげ、長征も終わりを告げた1936年10月26日の夜のことである。会寧の北方を流れる黄河を渡り、陝北とは逆方向の甘肅省西部へ向かう、奇妙な2万余りの部隊があった。これは、ふたたび分裂をおこした張国燾の命令で、寧夏省へ根拠地をつくるため出発した第4方面軍西路軍だった」

毛沢東本人は、1936年12月、陝西省北部根拠地の赤軍大学における講演で、この間の事情を次のように語っている。「10年間にわたるわれわれの戦争で、戦略的防御の問題について、二つの傾向がしばしばうまれた。一つは敵を軽視することであり、もう一つは敵におびえることである」「敵におびえた極端な例としては、退却主義的な“張国燾路線”がある。赤軍第4方面軍の西路軍の黄河以西での失敗はこの路線を最終的に破産させた」「1936年7月、赤軍第4方面軍は、第2方面軍と合流したのち、西康省甘孜県から出発して、北上のための

移動を行った。同年の10月、甘肅省につき、第1方面軍と合流した。張国燾は、このときにもやはり退却主義の路線を固持し、反党的な、赤軍を分裂させる犯罪的な活動を続け、第4方面軍に黄河をわたって西進するよう勝手に命令した。11月、黄河をわたった2万余人は西路軍を編成し、甘肅省の西北部に進発した。1936年12月、西路軍は、敵の包囲攻撃で重大な挫折をこうむり、1937年3月に完全に失敗してしまった」(毛沢東選集第1巻「中国革命戦争の戦略問題」1965年11月 新日本出版社刊)

これは明らかな間違いである。最近の研究では、西路軍は張国燾の指示ではなく、「1936年11月、中央革命軍事委員会は西路軍を編成し、西征させ、1年計画で河西回廊に根拠地を建設することにした」(「中国共産党史の論争点」：岩波書店刊参照)ことが明らかにされている。さらに、そのときの中央革命軍事委員会の主席は毛沢東であったことも判明している。つまりこの西路軍作戦は毛沢東の指示であり、その失敗の全責任は毛沢東が負わねばならないのである。

毛沢東の死後、鄧小平の認可のもと、陳雲の建議により、当事者の李先念は西路軍問題の資料を集め再調査をして、「西路軍は中央の指示により河西回廊に根拠地を築くために西進したのであって、張国燾路線の結果ではない」ことを証明した。さらに李先念は、1991年に共産党史が出版されたとき、西路軍関係部分のあいまいな表現に怒り、「中央革命軍事委員会の命令により」と訂正させた。

西路軍は明らかに毛沢東の指示命令のもとに進軍し、壊滅したのである。毛沢東はなぜ西路軍作戦を敗行させたのか。それまで敵の意表をつく作戦を展開し翻弄してきた毛沢東が、なぜやすやすと馬家騎馬軍団の餌食になってしまったのか。なぜ得意の遊撃戦を展開しなかったのか。なによりもこの長征史上最大の汚点である西路軍作戦が、なぜ長らく共産党史上から抹殺されていたのか。それらは現在至るまでも大きな疑問として残っている。

上海の第1回共産党大会旧址に、その会議場を蠅人形で再現した部屋がある。そこでは毛沢東が中央で熱弁をふるっている。その片隅で少しテーブルから離れて、半ば傍観者的に張国燾が座っている。しかし当時の事情はその正反対で、議長役が張国燾で毛沢東はよそ者扱いのようであったという。また四川省で第1方面軍が第4方面軍と合流したとき、毛沢東が率いるはみすばらしい第1方面軍は、張国燾率いる威勢のよい第4方面軍から見下げられたという。これらのことは毛沢東の心中に大きな怨みを残したのではあるまいか。西路軍の見殺しには、ライバル張国燾への私怨があったと考えるのは無理があるのだろうか。原因はともかくとして、この西路軍作戦では、遊撃戦の得意な毛沢東が、正規戦をわざわざ仕掛けて完敗したわけである。これでは毛沢東を戦略・戦術の大家と誉めそやすわけにはいかないのではないか。

3. 回族に怨念はなし。

私は西路軍を壊滅させた回族軍閥の馬家騎馬軍団の青海省西寧市の馬歩芳記念館に行ってみた。広い敷地に大きな建物がずらりと並んでいたが、華麗な感じはしなかった。私は10年ほど前、雲南省の南方で解放前の大地主の邸宅(建水県：朱家花園)を訪ねたことがあり、そのときその華麗かつ壮大なことにびっくりしたことがある。その邸宅と比べるとこの大軍閥の頭目の家は貧弱であった。それでもおもしろかったのは、ここで馬歩芳は多数の妻と同居しており、彼女たちの出身部族は回族・漢族・サラ族・チベット族・蒙古族などであり、それぞれの部屋がさながら民族展示場のようになっていたことである。この女性関係が華麗な馬歩芳親分が馬家騎馬軍団を率い、規律正しい西路軍を壊滅させたのかと思うと、私の心中はいささか複雑だった。



西寧市：馬歩芳記念館

西路軍の回族との戦いは激戦であり、部隊は壊滅した。それに比べると、長征中、四川省のチベット族地域を逃走中の労農紅軍は、チベット族のゲリラ的な戦いに悩まされたのであり、そこに甚大な損傷はなかった。つまりチベット族との間に激戦はなかったということである。河西回廊での回族との死闘は激戦であったにもかかわらず、中国建国後、中国共産党の回族への怨念行動はなかったし、それに対して回族の暴動も起こらなかった。チベット族との間に激戦はなかったのに怨念が残って、それがチベット族の弾圧につながったと強弁するには無理がある。ここで再度、怨念説は撤回する。これが私の前後4回に渡る現地調査の結果の結論である。

以上